2. 成果の抽出

帰国後、海外研修の成果をまとめるため、参加者全員でワークショップを開催した。事 前研修で調査項目をフォーカスしていたものの、現場では多くの情報や学びを得たため、 まず全員でそれらを整理することにした。

参加者は研修に同行した田中委員のファシリテーションのもと、「自立発展性を確保して プロジェクトを終了するためにはどのようなアプローチが必要か」について、現場で直接 確認された事象をカードに記入していった。

その後、出たカードを全員で類型化し、それぞれの類型グループに表題項目をつけた。 その結果、アプローチは8項目に整理された。表1の右欄が参加者から挙げられた全ての カードで、左欄がそれをまとめた表題である。

【表 1】「自立発展性を確保してプロジェクトを終了するために必要なアプローチ」

	表題項目	必要なアプローチ
1	社会・文化的背景を考慮する	・地域の文化・社会を理解しそれを活動の中身に活かす
	アプローチ	・文化・習慣を配慮した活動計画・実施を行う
		・形成段階で社会・文化的背景をよく理解する
L		・文化や社会背景、自然環境にあった無理のない活動内容にする
2	現存するシステムを活用す	・現地にすでに存在するシステム(組織・枠組み)を活用する
	るアプローチ	・既存の制度・人材を活かす
ł		・地域リソースをしっかり把握できている
		・しくみを明確にする
ĺ		・プロジェクトを実施できる枠組み(制度)を整える
		・複雑な行政ライン(タテ)と地域(ヨコ)のラインをバランスよく意志伝
		達し、システムを形成していった
3	過去の経験を活かすアプロ	・過去の経験からの学びを組織内で活かす
	ーチ	・過去の失敗を検証し、次の活動に活かす
		・プロセスの中での課題を次へ活かすアプローチ
4	関係者全てがつながり情報	・それぞれの立場に合った役割分担を考える
	共有されるアプローチ	・実施前にきちんと説明するアプローチ
ĺ		各現場レベル・キーパーソンに対して、プロジェクトへの共通認識と方向
]		性を持つため、コミュニケーションを徹底する
		目的を各層の人が共有している
5	リーダーを育成するアプロ	・特定の人材ではなく、より多くのリーダーを育てる
	ーチ	・複数のリーダーを育成する
		・ひとつひとつのプロセスで人材を確実に育てていく
		・リーダーを育成するためのトレーニングを充実させる
		・活動のリーダー及びファシリテーターの育成をしっかり行う
!		・リーダーの育成をする(特定の個人だけでなく、関係者のコミュニティの
		中全体で)

6	お金をかけないアプローチ	・資金をかけすぎないアプローチ
		・投入は最低限にする
		・投入をおさえる
		・事業予算(特に実施費用)は(ハンドオーバー時を考え)現地が対応でき
		る形で見積もり実施する
		・適正なレベルと範囲の活動(技術)を導入する
		・外からの投入がなくなっても維持していけるシステム作りをする
7	軌道修正を可能にするアプ	・ルール、システムを明確にしながら、柔軟に対応する部分も作る
	ローチ	・幅をもたせるアプローチ
8	問題解決能力を育てるアプ	・問題を発見し、C/P だけで解決することができる
	ローチ	・プロジェクト終了後、C/P が問題や課題を見つけ、解決のため話し合い、
		決定する場や仕組み(定例ミーティング)がある
		・模擬授業と反省会をセットで実施する
		・対象の意見(ニーズ)を定期的に吸い上げ、C/P が活動を修正できている
		・現地側(受益者)が課題に気付く
9	撤退を見越して計画を立て	・外部からの投入はいずれ無くなっていくことを伝え、広く関係者に理解し
	るアプローチ	てもらう
		・時間の経過と共に外部者の役割を徐々に減らしていく
10	目に見える成果を出してい	・成果が見える、また現場で使える技術を教える
	くアプローチ	・参加することで実際に役立つことを提供するアプローチ
		・パートナーや対象者の自信・誇りにつながる工夫をする
11	相手の主体性を伸ばすアプ	・選択肢をいくつか提示し、取り入れられるものから農民が選べるアプロー
	ローチ	チ
		・対象者に選択肢を与えるアプローチ
·		・C/P と一緒に活動を計画し、実施する
		・いつでも参加できる状態を提供する welcome アプローチ
		・プロジェクト初期段階(形成段階)では、現地側の主体性を尊重しつつ、
		リーダーシップを発揮する
		・初期段階でプロジェクトを引っ張るキーパーソンを投入する
12	信頼関係を構築するアプロ	人的ネットワークを活かすアプローチ
	ーチ	・現地側と共に"恊働"する姿勢を持つ

3. 項目の集約

ワークショップでは続いて、研修成果としてまとめられた 8 項目のアプローチを更に大項目に集約した。それが表 2 である。

【表2】

大項目	表題項目			
現場重視の運営	・社会・文化的背景を考慮するアプローチ			
	・過去の経験を活かすアプローチ			
	・起動修正を可能にするアプローチ			
人材育成・共働	・リーダーを育てるアプローチ			
	・問題解決能力を育てるアプローチ			
	・目に見える成果を出すアプローチ			
	・相手の主体性を伸ばすアプローチ			
	・関係者間で情報を共有するアプローチ			
	・信頼関係を構築するアプローチ			
動くシステム	・現存するシステムを活かすアプローチ			
	・お金をかけないアプローチ			
	・撤退を見越して計画するアプローチ			

4. 発表の分担

帰国報告会では参加者は、調査グループとは別に「訪問先プロジェクト紹介」班と 3 グループの発表班に分かれて、各大項目ごとに成果発表を行った。

班	発表内容(大項目)	メンバー
	訪問先プロジェクト紹介	緒方、関野
1	現場重視の運営	池田、小西、田村
2	人材育成・共働	吾郷、西田、横山
3	動くシステム	内川、鈴木、西屋

「訪問先プロジェクト紹介」班は、前項「訪問プロジェクトの概要」に掲載した資料を 作成し、報告会冒頭にて出席者に対し説明をした。

1班~3班による発表資料を以下ページに掲載する。

帰国報告会発表資料 1班

➡ 現場重視の運営

- 1. 過去の経験を活かす
- 2. 軌道修正を可能にする
- 3. 社会的・文化的背景を考慮する
- 4. JICA-NGOの共通点
- 5. JICA-NGOの相違点

第1班(池田、小西、田村)



1. 過去の経験を活かす

■プロセスの中で現れた失敗や課題を検証・ 評価し、経験から学び、関係者で共有する ことで次へ活かしていく手法を形成段階か ら持つこと。

2

1. 過去の経験を活かす

7

配慮すること

- 共有と評価をする機会を持つ。
- 他団体の失敗経験からも学ぶ。
- パイロットプロジェクトを小規模に実施し、実現可能性を探る。

1. 過去の経験を活かす



事例として・・・・

- SMEMDPでの反省が専門家などを通じて活かされた(JICA)
- ▶ 中央主導ではなく対象者が地域ごとに等しく参加できていた(JICA)
- 教育行政が自主運営するように意識向上させていた(JICA)
- 現場レベル・地域資源に即した技術の移転(JICA)
- 日本人派遣者や農場長が派遣終了した後、経験や 学びを蓄積する配慮が不十分であった(ARI)

3

2. 軌道修正を可能にする

- ルールやシステムを明確にしながら、行動 に際しては柔軟に対応する部分を作って おく。
- 形成段階から信頼醸成とコミュニケーションを高め、軌道修正できる要素・幅を持たせる。

2. 軌道修正を可能にする



配慮すること

- 各レベルで意見調整して現場の声を反映 すするシステムとそれを担うキーパーソン を確保するアプローチ
- ▶ 意思決定のバランスと責任分担の明確化。
- 規模を適正にするアプローチ
- 対象者の日々のニーズを盛り込むアプローチ

2. 軌道修正を可能にする



事例として・・・

- 各レベルの関係者間で、公式・非公式に良いコミュニケーションが生まれた(主事・校長・教員)(JICA)
- 各レベルごとにある程度の裁量を持たせた(JICA)
- 住民の収入向上に繋がる活動を盛り込んで言った (ARI)
- CP個人のリーダシップが強すぎ、計画性がない (女性G、豚銀行など)(ARI)
- ミニマムな人員で運営管理できる農場規模(ARI)

7



3. 社会的・文化的背景を考慮する

- 形成段階から地域の社会・文化的背景を 理解すること。
- 参加者が楽しみながら実践・継続できる活動にしていくこと。

8

3. 社会的・文化的背景を考慮する



配慮すること

- 対象者が楽しみながら参加・継続できるように配慮されたアプローチ
- 既存の社会組織になじむシステム作り
- 対象者の日々のニーズに対応する配慮

3. 社会的・文化的背景を考慮する



事例として・・・

- 教師が月一度会って会話と討論を行なうことを楽 しみにしている(JICA)
- 活動を通して教師同志の仲間ができる(JICA)
- 既存の教育行政を活かすアプローチ(JICA)
- サンタリタの環境に適した農法を実践(ARI)
- 奨学生が農場で働き、友人に会うことを楽しみに している(ARI)
- 組合活動が上手く運営できなかった(ARI)

10



4. JICA-NGOの共通点

- 共通点:適正な規模であり、特別大きな予算を必要としない配慮がなされている。
- 対象者のニーズに対応した配慮がなされている。



5. JICA-NGOの相違点

- 経験を蓄積するシステムについて、JICA はできているが、ARIは不十分である。
- 意思決定のプロセスについて、JICAは明確であるが、ARIは不明確。

12

帰国報告会発表資料 2班

自立発展性につながるアプローチとは ~ 人材育成・協働 ~



第255 :横山、西田、善郷)

- 1. リーダーを育てるアプローチ
- 2. 相手の主体性を引き出すアプローチ
- 3. 人的ネットワークを生かすアプローチ
- 4. モチベーションを高めるアプローチ



1. リーダーを育てるアプローチ

1-1. 複数のリーダーを育成する

(具体的な事例)

- SBTP:プロジェクト開始当初は、過去にトレーニングを受けた先生がファシリテーターをしていたが、クラスター内での研修を通じて一般参加者(教員)がトレーナーとして育てられていく。
- MC・ARI:リーダーとして育てようとした人が活動から離れ、その代わりを担う人がいなかったため、活動は維続されなかった。

2



1. リーダーを育てるアプローチ

1-2. 段階的にリーダーを育成する

(具体的な事例)

SBTP: プロジェクトの活動を通じて一般参加者(教員)が実力を上げてくるに従い、トレーナーの質のさらなる向上が必要とされてきている。



2. 相手の主体性を引き出すアブローチ

2-1. ブロジェクトの形成段階において活動を現地 側の活動として位置づける。

(具体的な事例)

■ SBTP:教育省のプログラムとして位置づけたことにより、主体性が根付いている。

.



2. 相手の主体性を引き出すアプローチ

2-2. 相手側の活動と位置付けつつも、形成段階においては、外部者が主導的役割を持ちながら、徐々にそれを相手側に委譲してゆく。

(具体的な事例)

- SBTP:日本人専門家の「黒子」としての役割が大きかった。
- MC・ARI:精米所の運営を全て農民に任せた結果、活動が続かなかった。



3

2. 相手の主体性を引き出すアプローチ

2-3. 外部者は黒子として、ビジョンの提供、関係者のネットワークづくり等の役割を担う。

(具体的な事例)

 SBTP:プロジェクト形成時には、前面にフィリピン人を出しつつ、日本 倒専門家がSBTPのしくみについてのアイディアを提供し、黒子として 背後で関係者をうまくつないだ。



2. 相手の主体性を引き出すアプローチ

2-4. 自主的な参加を促すために「入り口」(=活動の選択肢)を増やす。

(具体的な事例)

MCARI: 各活動に"いつでもウエルカム"の形がある。ex.) クッキー販売など女性グループの活動、かつての精米所の運営、豚の配布プロジェクト、研修への参加の機会提供、奨学生支援



3. 人的ネットワークを生かすアプローチ

信頼関係を構築し、人的ネットワークを活かす。

(具体的な事例)

- SBTP: MCリーダーが日常的に市長とインフォーマルな付き合いを持っていることで地方行政からの協力が得られやすい。
- SBTP: 日本人専門家の青年海外協力隊時代からの関係者をプログラムにうまく引き込んで協力体制を敷いている。

8



4. モチベーションを高めるアプローチ

4-1. プロジェクトの実施段階で、自分たちの問題を認識し、解決に向けて議論する場を提供し、モチベーションにつなげる。

(具体的な事例)

SBTP: デモ授業の後の検討会(MTミーティング)において活動を振り 返り、議論する機会がある。



4. モチベーションを高めるアプローチ

4-2. 活動の中で、目に見える成果を出していく。

(具体的な事例)

- SBTP: 研修を受けた先生の手元にレッスンプランが残る。
- SBTP: 生徒の成績がアップしている。
- MCARI: 活動により現金収入が得られる。

10



JICAとNGOとの違い・共通点は?

- 1. リーダーを育てるアプローチ
- 2. 相手の主体性を引き出すアプローチ
- 3. 人的ネットワークを生かすアプローチ
 4. モチベーションを高めるアプローチ

基本的に、いずれのアプローチにおいても、配慮すべき 点は**NGOとJICAに共通**するのではないか。

※ただし、「2-1、プロジェクトの形成段階において活動を現地側の活動として位置づける。」については、行政や組合など活用できる既存の組織がなかったMC・ARIのケースなどは、当てはまらない。

帰国報告会発表資料 3班



2004年度NGO-JICA相互研修(海外研修)

自立発展につなげるアプローチとは ~動くシステム編~

2004年11月30日

第3班

(APSD 西屋、JVC 鈴木、JICA 内川)

自立発展につなげるアプローチとは

- 1. 人材育成&共働
- 2. 現場重視の運営
- 3. 動くシステム
- 3-1. 現存するシステムを活かすアプローチ
- 3-2. お金をかけないアプローチ
- 3-3. プロジェクト終了を意識したアプローチ

2



3-1. 現存するシステムを活かすアプローチ

A. 具体的にどんな注意点·配慮が必要か

プロジェクト対象地にどのような組織・制度が存在し、どのように機能しているかを把握し、活用する。

3

ょ3-1. 現存するシステムを活かすアプローチ

B. それを学んだ事象

〔JICA:SBTPプロジェクト〕

Positive: 行政の仕組み (縦のライン: 中央 - Region - Division - District) と地域の広がり(横のライン: クラスター/学校群)をバランスよく調整し、プロジェクト活動実施のためのシステムを形成した。

[NGO:ARIプロジェクト]

Negative: 既存の住民組織の活用が困難で、うまく活用できず、 既存の住民組織と重複する組織を作ってしまった。



3-1. 現存するシステムを活かすアプローチ

C. JICAとNGOの共通点・相違点

〔共通点〕

・JICA(SBTPプロジェクト)及びNGO(ARIプロジェクト)とも、 プロジェクトの自立発展性を確保するために、現存するシス テムを把握して、活用しようとしている。

[相違点]

・活用するシステムとして、JICA(SBTPプロジェクト)は地方 行政に、NGO(ARIプロジェクト)は住民組織にアプローチした。アプローチ先の組織が比較的確立しているものだった か否かによって、事象がJICAではPositive、NGOでは Negativeに分かれた。



3-2. お金をかけないアプローチ

A. 具体的にどんな注意点・配慮が必要か

プロジェクトを現地にハンドオーバー する時に、現地だけで運営できる範囲・ 規模の資金を投入する(=適正技術)。



3-2. お金をかけないアプローチ

B. それを学んだ事象

[JICA:SBTPプロジェクト]

Positive: 現地の学校の教室を教員研修の場としている。

(ソフト面重視)

P&N:教師が交通費や教材を自己負担している。

(受益者負担)

[NGO:ARIプロジェクト]

Positive: 地元のマテリアルを有効に使った農業技術を 提案している(堆肥づくり、野菜の自家採種等)。

Positive: 材料が現地で手に入る安価な技術を利用した

水汲み風車の導入。



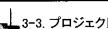
3-2. お金をかけないアプローチ

C. JICAとNGOの共通点

〔共通点〕

- ・JICA(SBTPプロジェクト)及びNGO(ARIプロジェクト)とも、 現地にあるものを利用している。
- ・JICA(SBTPプロジェクト)及びNGO(ARIプロジェクト)とも、 予算のないことがポジティブに作用している(お金をかけな い工夫をし、必要なところに最低限の投入をしている)。

※相違点はなし。



,3-3. プロジェクト終了を意識したアプローチ

A. 具体的にどんな注意点・配慮が必要か

計画段階で、関係者間がプロジェクト 終了時のイメージを共有し、実施時に、 外部者の関与を徐々に減少する。



3-3. プロジェクト終了を意識したアプローチ

B. それを学んだ事象

〔JICA:SBTPプロジェクト〕

Positive:計画段階から、終了期間を設定した。 Positive:専門家自身が"自立"の必要性を認識している

例)特殊学級の経験

Positive:専門家が離れた後、協力隊がしばらく残り、必要

なフォロー活動の調整を担う。

(NGO:ARIプロジェクト)

Positive:マネジメント能力を有する人(Sr.ハージ)を カウンターパートととして採用し、育成した。

10

。3-3. プロジェクト終了を意識したアプローチ

JICAとNGOの共通/相違点

〔共通点〕

・JICA(SBTPプロジェクト)及びNGO(ARIプロジェクト)とも、現地の 関係者のみで運営できる体制を構築していくよう配慮している。

・プロジェクト開始当初から終了時期を明確に設定しているJICA (SBTPプロジェクト)は、終了時期を関係者が共有し終了に向けて活 動できる一方、予め定められた期間に活動が縛られる危険性がある。 -プロジェクト開始当初は終了時期をあまり意識していないNGO(ARI プロジェクト)は、現地の状況に合わせて柔軟に活動できる一方、関 わる人の関係が続く中で、プロジェクト期間が曖昧になってしまう危 険性がある。

5. 参加者の感想

(財) 太平洋人材交流センター 関野 史湖

今回のNGO-JICA相互研修のテーマは「プロジェクトに終わりはあるのか?自立発展性を考える」だが、さて「自立発展性」とは?分かったつもりで言葉を使っているが、実際どういう条件が揃うとプロジェクトが自立していると言えるのか?突き詰めて考えると意外と具体的なイメージは湧いてこない。

9 日間の間に私は「自立発展性」について何か分かってくるのだろうか?不安を覚えつつ、11月22日からの海外研修に参加させていただいた。

研修の初日に関係者へのインタビュー案をまとめ、2 日目からはフィリピン・ネグロス島へ移動。到着後は、専門家からのレクチャーや、関係者、学校の生徒へのインタビューなど、活動が目白押しであった。そしてこれらの活動は日中だけにとどまらず、夜は情報のまとめ&シェアの時間。インタビュー、まとめ、シェア、インタビュー、まとめ、シェア・・・。これらの繰り返しで頭の中は情報でぱんぱん、時間が経つにつれ脳が飽和状態になってきた。それでも、ディスカッションの中で新しい考え方に気がついたり、別の視点が出てきたりして、毎日がとても刺激的で本当に楽しかった。

今回の研修ではNGO、JICAのプロジェクトを1つずつ視察させていただいたが、2つのプロジェクトに共通していたのはなんといっても関係者の皆さんの熱意だった。

現場の説明も、実際にプロジェクトを動かしていく中で、毎日考え、悩み、そして出されてきた考えに基づいているだけに、言葉の一つ一つに迫力があり、プロジェクトに関わっている皆さんの真剣さ、そして経験の力を感じる毎日だった。

さてさて、研修参加の結果私は「プロジェクトの自立発展性」を理解したのだろうか?残念ながら、9 日間でものすごく確固たるイメージが出来た、という訳ではない。しかし、今回の研修でこういったことを考えたことはとてもいいきっかけになった。今後仕事を通じて、自分なりの自立発展性のイメージを見つけることがきっとできると思う。

今回、私達の討論をガイドして下さった先生方、現地で熱心に説明下さった 専門家の方々、現地事務所を始めとし、お世話になった関係者の皆様、全ての アレンジを下さった事務局の方に心から御礼を申し上げたい。そして、最後に、 一緒に研修に参加し、夜中まで一緒に作業した参加者の皆さん!研修中はあり がとうございました!そして、これからも宜しくお願いします! 海外研修では、現地7日間という短い時間ではあったが、「プロジェクト」の ナマの部分、実に様々な人が関わり作り上げていることが実感できた。

JICA の事業では、一部の教員が中央で研修を受け、それが段階的に各地方の教員に伝わるというトップダウン形式から、教員が地元で参加し、自分たち自身が模擬授業を組み立て実践するという現場中心型の研修として確立するまでには、それ以前の失敗からの学びや大小さまざまな働きかけが存在することが現地のプロジェクト説明で分かった。模擬事業の後の検討会では先生1人1人が積極的に教え方について話し合っており、先生同士の関係作りの場としても十分活かされていると感じた。

フィリピン社会とその教育事情に明るい原専門家はじめプロジェクト関係者が、先生と校長先生、学校と地域の教育行政を結ぶ「縦と横」の関係作りに奔走したわけだが、彼らの『黒子的』働きかけは、側面支援する外部者の役割の可能性を考える上で大変参考になった。

その後、私たちは場所をバゴロド市中心からサトウキビ畑に囲まれたサンタリータに移動し、全く違った環境の中で『自立発展性』を考えることになった。アジア学院と地元の修道会が何年もかけて作り上げた研修センターでは、水、作物、家畜、生活廃棄物が循環している。ほんの少しだけだが私たちも農作業や家畜のお世話をさせてもらったことで、ハイテク世界を抜け出て、体で感じる時間が持てた(そしてこの農場で、研修参加者の間の化学反応がいい感じで強まったのではと思います・・・)。

この地域の多くの人がサトウキビの単一栽培に頼らざるを得ない社会的構造が今でも強く残る中、有畜複合の自然農業を普及していくことの困難さも周辺農民へのインタビューから実感できた。同時に、農作業を楽しむ農場の奨学生や、ネグロス島の他地域から学びに来る若手NGOボランティアなどにも会うことができ、小規模な活動でも効果の持続という点で発展性を感じた。逆に、経営者の不正などのトラブルで閉鎖してしまった別の大規模な有機農場も見学でき、「適正規模」についても考えさせられた。

フィリピン研修では、毎日さまざまな情報を得てはそれを共有し、喧々諤々と分析し合い、話し合うという作業を JICA、NGO 参加者の仲間とみっちりできたことで多くを得ることができた。多くの学びを提供してくださり、現地で温かく受け入れてくださった JICA およびアジア学院ーオーガスチン修道会の関係者皆様、深く難しいテーマを掘り下げ考えるヒントと仕掛けを準備してくださった検討委員、引率者の皆様に深く御礼申し上げたい。

「それぞれの在り方」

(社) シャンティ国際ボランティア会 横山 葉子

期待以上に充実した研修でした!

まずは JICA 側ですが、正直なところ、SBTP のビデオを東京で見た時、「プロジェクトをきれいに写した広報ビデオ」だと思い込んでいました。ところが、現場を訪ね、ありのままを見せられると、発展的終了を迎える要素が次から次に見えてきて、内心「こんなことがあり得たのか」と驚きました。

特に印象に残っているのは、SBTP の現場の先生(しかも校長先生とかでなく普通の先生です)の何人かがとても高度なファシリテーション能力を持っていたことです。今後、そのような先生方がさらに仲間の中でリーダーシップを発揮していくのだろうと思うと、まるで宝石の原石がどんどん発掘されてどんどん磨かれ輝いていくように思えました。人材育成の上で手をかけたリソースパーソン的なリーダーだけでなく、もれなく末端の更に末端的なリーダーが自然発生的に育っていった形でした。

アジア学院においては、独自のペースや在り方を崩さずに、息の長い活動を 目指しているように見受けられました。報告会では発展的終了において弱い点 が多いと聞く側に受け止められがちでしたが、私個人はそのように思っていま せん。いろいろな形があってよい訳で、サンタリータ研修所の活動は今の形を 維持しながら、次の展開をゆっくりと見つけていくことが発展的なのかもしれ ません。それぞれの在り方や発展に向けて要する時間があると思うのです。

長い目で見れば、今活動から離れている元リーダーにとっても今の時間は本の"ひと時"に過ぎないのかもしれない・・・と、そんな気持ちで終わりない活動に熱すぎない暖かさを持ち続けるスタッフの思いが伝わりました。

JICA、NGOの両方に強みと弱みの両要素はあったと思います。結論はつまり、「プロジェクトが終了しても活動は続く」ということですね。今後も何らかの形でこの研修で学んだことを活かしていきたいです。

最後に、この研修において多方向から支えてくださったスタッフの皆さま、 ありがとうございました。そして、"妥協知らずの頑張り屋"の仲間に出会えた ことを心から感謝いたします。

6.参加者アンケート集計結果

田中博

多くの参加者が、研修の目的やテーマについて「十分達成できた」「ほぼ達成できた」と回答している。特にプロジェクト終了や自立発展性についてイメージを持つことができ、満足度が高い。また、ほぼ全員が「国内研修に参加していたから海外研修を充実することができた」と答えており、国内&海外と研修がリンクして実施され、効果をあげていることがわかる。昨年もそうだったが、国内で"頭"で学んだことを、海外で"身体"で実感し、より研修成果を身につけることができたといえる。海外研修の前に頭を整理するために提出する課題も、量や内容、タイミングともに適切であったと評価された。

訪問プロジェクトの説明資料もほぼ妥当であったが、ネグロス島の厳しい社会背景についての解説が不十分で、現状を把握するまで時間がかかってしまった受講生もいたようである。

一方「何をもって終了と判断するのか、達成していない場合どうするのか」 の設問に対しての満足度は低い。限られた研修期間の中で問題を掘り下げるこ とができなかった為と思われる。一度の研修でどこまで獲得すべきかという目 的にもよるが、今後の課題である。

NGO、JICA の案件訪問とも同じネグロス島内で行われたため、昨年のように島の移動で時間を費やすことはなかった。この研修の特徴でもあるが、「なるべく多くの立場の方々に、直接会ってお話をいただく」ため、日中はほとんど調査にためにつぶれ、整理やまとめは夜ホテルや、電気のこない宿舎でろうそくの火のもと、遅くまで行われることになった。熱心な参加者ならばこそであるが、日程は「きつい」という回答が半数あった。

本研修の利点を残しつつ、ゆとりある日程を考えていく必要がある。研修の時期、期間、人数は適当であり、参加者を班に分けて、係りを分担して運営したことも良かったように思われる。

参加者アンケート 集計結果

(コメントは抜粋して紹介)

回答者数:12名(現地参加者1名含む)

I. 研修の目的やテーマの達成度について

(1) 今回の海外研修で、以下の項目についての理解はどの程度達成されたと思いますか? 十分達成できた◎ ほぼ達成できた○ **多**少はできたが不十分△ 達成できなかった×

	項目	0	0	Δ	×
1	パートナーの選び方、基準	2	3	6	1
2	パートナーとの関係のあり方、オーナーシップを持ってもら うにはどうしたら良いか	4	8		
3	終了のイメージはどの時点で持つべきなのか。途中からでも 良いのか	9	3		
4	何をもって終了と判断するのか。終了の指標は?達成してい ない場合どうするのか	1	5	7	
5	終わることの出来るシステムとは?それはどうやったら出来 るのか	3	9	3	
6	自立発展性の具体的なイメージを持つ	5	6	1	

(2) あなたにとって、一番使えそうな学びや教訓はどんな事でしたか?

- 自立発展性を目指すための、具体的なアプローチ方法のヒントを得られた。(NGO)
- SBTP の原専門家の経験、知識、技術、心構えには多くのことを学んだ。全体の方向性を明確にし、その中で現状としてやるべきこと、できることをやるといったこと。(JICA 参加者)
- プロジェクト形成段階から、パートナーとの意思疎通を常に意識して行うこと、また、 関係者間の信頼醸成を促すよう、働きかけること。(NGO参加者)
- 相手方に主体性を持たせるしくみづくり(「日本のプロジェクト」ではなく、「自分たちのプロジェクト」にする。リーダーの育成と、末端の人たちの主体的な参加が重要) (NGO)
- 外部者の果たすべき役割=黒子(アイディア提供、情報の共有、関係者間のつなぎ役) (NGO、JICA)
- プロジェクトを始める前から、終了後のことを考えておくということ (NGO、JICA)
- 「自立」と「発展」のステージは異なることが理解できました。概ね事業を進めていると、自立を意識することはあっても、その事後発展の形態を意識する事は少ないといえます。(NGO)
- 事業形成実施において、文化的な配慮と文化的側面を活かしながらの柔軟な対応が必要 (NGO)
- 現場における日本人スタッフの関わり方(NGO)
- NGO 参加者の所属する団体は大きな団体が多かったので、プロジェクトに対する姿勢・ 意識の差をあまり感じなかったのが発見だった。(ある程度 2~3 年のスパンでプロジェクトを見ている等)(JICA)

- NGO、JICA と関係なく、国際協力を行うものとして、現地の外部者として、どういった スタンスで活動していけばいいのかという同じ思いに悩んでいる事を知れてよかった。 (IICA)
- 支援側に必要とされる一歩引いた関わり方(JICA:専門家の「人を育てる」姿勢、NGO: プロジェクト関係者との関係の持ち方)(NGO)
- (3) 当初立てた、あなたの組織やあなた自身の課題は、研修により今後克服していけそ うですか?それはどんな点ですか?
- 当初自分が立てた「NGO と JICA では C/P や対象者との接し方が異なるのか」という課題は、ある程度理解できた。基本的に政府関係者を対象としながらも間接的に受益者である教師や生徒への影響を導くやり方は、直接住民を対象とする NGO のやり方よりも複雑で手のかかるアプローチだと思うが、それ故に組織として制度的に戦略的に実施しないと成果が見えにくい。もう一つの課題、地域社会の伝統文化や価値観、習慣の尊重については、それほど見ることができなかった。特にネグロスという長く大土地所有者に支配されてきた土地柄ゆえに、住民の中に協働や相互扶助といった習慣があまりなく、それがプロジェクトの実施を困難にしているように感じた。(JICA 側参加者)
- 自分が担当している事業(パレスチナ自治区での栄養改善/子どもたちの文化・教育 支援など)と、今回訪問したネグロス島西部の状況は当然大きく異なっているが、多 くの人びとが厳しい生活環境で暮らしているという点では共通しており、いかに地域 の中の資源を活かし、地域の中で人を育てていくかという点では同じ課題も共有して いる。自分たちの活動に直接適応できるものが明確にあるかは分からないが、現地で 活動を担うべき人のやる気、元気を引き出せるよう努力することの大事さが実感でき た。(NGO 側参加者)
- 制度面での課題なども多いので、今回の研修で課題が克服できるとは思わないが、課題について、頭を整理することはできたと思う。(JICA)
- 自身の所属団体では実際に海外で長期プロジェクトを実施することはないが、短期プロジェクトでもカウンターパートとの関係が上下関係になりがちで、相手の自主性をつぶさない関係の維持の仕方に苦慮することがあった。今回視察させていただいた両案件とも、非常にバランスのよい関係をもたれていて、参考になる。(NGO)
- 支援している女性グループが自立することを目指すことに確信が持てました。今後の 計画作りに自立発展性という側面を盛り込んでいきたいです。(NGO)
- 本来は自立や発展よりも救援・復興ということをテーマに取り組む部署に居るため、 意識することの少ないテーマについて考察する機会を得ることができ、自分にとって もよい学習機会となりました。(NGO)
- 今後、新事業開始・既存事業の期間延長・次フェーズへの流れなどにおいての事務局 レベル検討会で提案していける点があると思います。新事業立ち上げにおいて: 自立 発展的終了を意識した事業形成方法のイメージが持てる(各アクターが主体性とモチ ベーションを持てる組織システム作りへの提案)事業期間延長において: これまでに 積み残されている課題を克服していくための要因が具体化された(先につながる人材 育成、モチベーションを高める運営管理・モニタリングシステムの構築、カウンター パートの主体性を促しながら課題発掘し問題解決へ向かっていくことの重要性)(NGO)
- プロジェクト現場をほとんど知らない私にとって、現場で何が起きているか想像できるようになり、日本での業務をより適切に実施できるようになることが今回の研修の一番の目的であったが、この目的は、事前の配布資料と実際の視察やインタビューを

比較することで、プロジェクトの現実を少なからず学ぶことができ、達成できたと感じている。また、プロジェクト自立発展性において重要な事項について学べたことは、草の根技術協力事業の応募案件を選考する際の審査の視点として大いに役立つと思う。これらの事項は、プロジェクト視察前に想像していたことと大きくは変わらなかったものの、プロジェクトを視察することで、資料上では当たり前に要求される自立発展性に欠かせない事項が、実際には非常に難しいことを学ぶことができ、単に自立発展性に係る審査の視点を養うだけでなく、現実的な視点も養うことができたと思う。(JICA)

- ①「相手国にとって事業のプロセスの中に学びがあり、相手国の課題発掘や問題解決能力の強化に繋がっているか。」
 - →この部分が自立発展性に大いに役立つことが、JICA の事例よりわかった。
 - ②「相手国や住民の状況に応じて、柔軟に事業を展開しているか。」
 - →柔軟な事業の展開は、外部者である NGO や JICA が工夫してあげることも大切だが、 C/P 自体が工夫してやれるように、うまく C/P を育成してあげることが大切であることを学んだ。
 - ③「事業の効果が住民に継続的に裨益しているのか。」
 - →②に通じるが、うまく住民(対象者)の意見を吸収していかなければ、うまく住民 (対象者)に効果が継続して裨益していかないことを、JICAの事例より学んだ。
 - ④住民の意見(ニーズ)が事業プロセスや行政システムの中に反映されているか。
 - →住民(対象者)の意見をうまく収集する方法はあっても、吸収する方法がないと効果がないことが、JICA 事例よりよくわかった。(JICA)

(4) 今回の目的にあったのに、達成できなくて残念だったことはなんですか?

- 今回の研修がどちらかというと広く浅くといった内容であったように思う。時間的な 制約はあったと思うが、もう少し対象を絞り深く追求した方がよかったのでは?今、 何をしているかではなく、なぜそれをするのか、そうすることによってどんな影響が でるのかをもっと議論した方がよかったのでは?(JICA)
- 特にないが、海外研修の間に得られた情報などを、さらに深める機会がぜひほしい。 JICAと MC-ARI のそれぞれが直面する課題や、アプローチの違いなど、さらに理解を深め、共有したい (NGO)
- JICAと NGO の共通点・違いについての議論が消化不良。選定された案件が比較には向いていなかったと言えるかも知れない。(JICA)
- 「プロジェクト実施から決定までの一連の流れの理解」 今回のテーマである自立発展性に特に強く関連するトピックではないが、特に NGO の 場合、プロジェクトの実施から決定までどういう流れで処理されているのか理解した いと思っていた。今回視察させていただいた案件は、実施から決定まで一連の流れが あるというよりはどちらかというと協議によって毎回方向性を検討されているようで 確固たる流れがないように見受けられた。よって、上記の点は充分に理解することが できなかったように思われる(ただ、他の参加者の方にこの点についていろいろ伺っ たのである程度達成はできました)。(NGO)
- できれば、JICA の事業とアジア学院の事業を比較するのではなく、そこに共通する認識や相違する意識などについて深める事ができればと期待していました。最後の段階で SBTP の事業 (JICA) と MC-ARI (NGO) を比較するという事になってしまい、少々残念でした。(NGO)

- 「相手国の事業関係者が、外部者なしで事業の効果を継続展開できるのか。」 →NGOと JICA の事業双方とも、全く外部者としての支援を打ち切った状態ではなかっ たので、この点ははっきり調査できなかった。(JICA)
- プロジェクトの期間が決まっている場合で、終了できない場合にどのように持ってい くのか、今後の課題として取り組んでいきたい。(JICA)
- プロジェクト構築の側からしかサンタリータ研修センターの活動を検証出来なかった。 一つの視点からではなく再度「有畜複合の自然循環農業」という視点からも検証でき れば良かった。(NGO)

Ⅱ. 国内研修とのつながりについて

- (5) 国内研修があったから海外研修がより充実できたと思いますか?関連性はありましたか?
 - ア. 国内研修に参加していたから海外研修を充実することができた(11名) 【コメント】
 - 国内研修では、自立発展性について深く議論するまでには至れなかったように思うが、「プロジェクトとは何か」といった自立発展性について議論するために必要となる議論を十分にすることができ、海外研修をスムーズに進められたため、関連性は大いにあったと思う。また、既に国内研修で議論した仲間と海外研修に参加できたことで、タイトなスケジュールであった海外研修においても、互いのコミュニケーションが円滑に行われ、非常に良かったのではないか。(JICA)
 - イ. 少しは関連性を感じた(0名)
 - ウ. 余り関連性を感じなかった(0名)
- (6) 海外研修がなく国内研修だけでもほぼ同じ成果・学びが得られたと思いますか?それとも、海外研修があったから特に深められた、得られた学びがありますか?それはどんな事ですか?
 - ア. 国内研修だけでもほぼ同じだったといえるかもかもしれない(0名)
 - イ. 海外研修で、少しは深められた部分もある(0名)
 - ウ. 海外研修に行ったからこそ、深められたと思う(11 名) 【コメント】
 - 外部者である日本人から説明を聞くだけでなく、現地で対象者の声を直接 聞けたことで、より多角的にプロジェクトを見ることができた。また、ブロジェクトの自立発展性に欠かせない要素である「人材」がどの程度育っているか、どのような人間関係が築かれているかを見るには、現地に入って観察するのがもっとも良い。(JICA)

Ⅲ. 事前準備について

(7) 訪問プロジェクトについての事前情報(郵送・メール等)の内容・量は、適当でしたか?

ア. ほぼ適切 (9名)

【コメント】

- ただし、資料の内容で重複している部分と、分かりにくい部分があったので、もう少しまとめてもらえると更に事前の理解が深まったかもしれません。(NGO)
- 量はほぼ適切であったように思う。なお、どちらのプロジェクトもある資料の寄せ集めの感が否めなかったので、現在のプロジェクトの全体像や状況を適切に把握できるような資料があるともっとよかった(もちろん、準備が大変なのは理解できるが)。(JICA)

イ, 多すぎる (2名)

【コメント】

● 参加者各人の意見・回答などは特にお送り頂かなくても良かったのではないでしょうか。オープンで良いと思いますが、実際には記憶しきれなかったので。(NGO)

ウ. 少なすぎる(1名)

【コメント】

● NGO 案件の事前情報について、現地で頂戴した年表を最初にいただけると活動の展開の流れ、関係者を理解することができてよかったように思われます。頂戴した資料でもその辺は汲み取ることができましたが、自分で整理しないといけない部分もあり、また年代がはっきりしない点があったため活動の展開の流れなどが理解しにくかったところがありました。(NGO)

(8) 22 日のブリーフィングについて、時間量・内容は適切でしたか?不足はどんな点でしたか?

- 適切だった。(8名)
- 時間切れの感はあったが、スケジュール的にみて仕方のないものと思う。ただ、前述のとおり、アジア学院の活動については、これまでの活動全般の説明があったあと、今回何を見てくるか、全員である程度の合意を得ておいたほうが良かったのではないか。(JICA)

(9) 現地でのブリーフィングの内容・時間量は適切でしたか?

- 内容・時間量共に適切であったと思う。(7名)
- アジア学院の活動についても、事前に全容を把握した上で、対象とする活動を明確に してあれば、もっと短い時間で効率的に必要な質疑応答ができたのでは。(JICA)
- 適切であった。だが、そのブリーフィングを聞いた後のグループ作業時間が十分でないまま(うまく時間が取れないまま)、どんどん次のブリーフィングが入るので、消化不良のまま次々と作業を続行している感があった。(JICA)
- アジア学院のプロジェクトについては、全体像をつかみ、その中からどの活動に焦点を当てるか理解し共有するのに、少し時間がかかってしまったかもしれません。(NGO)

(10) 宿題があったことは、いかがでしたか?また、内容等は適当でしたか?

- 事前準備そのものは必要であるが、それが最後まで活用されたかどうか、内容に一貫性を持っていたかどうかは疑問である。(JICA)
- 大変役に立った。実際に会って誰に何を聞くのか、どのような質問だったら必要な情報を聞くことができるのか、具体的に考える作業が実際とても役に立った。実際のインタビューでは、自分たちの質問をインタビュイーに合わせて変えていかなければならなかった点も、宿題があったからこそ対応できたように思われる。(NGO)
- 宿題があったことで自分の課題が最初に明確にできたため、宿題を課せられたのはよかったです。内容としても適切だったと思います。(NGO)
- 少々重かったですが、内容的には十分であったと思います。(NGO)
- 満足に宿題に取り組めたとは言い難いが、事前に課題があったことで、配布資料を読む機会となったことは良かったと思う。インタビュー前に、自分が書いた事前課題を見直すことも多く、研修中も役立ったことを考えると、内容も適切であったと思う。(JICA)
- 事前に本研修が自分にとってどういうものなのか考えることになったのでよかった。 実際研修前に、他の参加者の宿題内容も見れて参考になった。個々人の視点の違いを 知っておくことは、研修中の意見交換のときの合意形成時にも多少役にたってよかっ た。(JICA)
- 宿題があることで、訪問するプロジェクトについて各自事前学習をするので良いと思う。(JICA)
- 質問事項が多くて少し負担でした。(NGO)

(11)22日(事前研修)の議論の時間量・内容は適切でしたか?

- 時間量、内容ともに適切だった。「自立発展のイメージ」をまず分析し、パートナーの 主体性、対象者の主体性、モチベーションなどの項目に整理できたことで、現地での 分析作業の基盤を作ることができた。(NGO)
- 当初は情報を整理する時間が少ないと感じました。しかし、実際現地に行けば想定していたことと全然違うことが沢山あったので、あれぐらいの時間で切り上げるほうが結局は効率的と思われます。(NGO)
- 実際には出発前の慌しさの渦中にあるため、議論は概ね「現地に行けばわかる」という結論になりがちです。あまり多くの時間を割く必要はなかったのではないかと思うので、適量ではなかったかと思います。ただ、帰国後にアジア学院さん、JICA さんにもう一度、整理の意味で質疑応答の時間が合っても良かったのではないかと思います。(NGO)
- 時間量:適当
- 内容:各チームに担当項目を配分したにも関わらず、その各担当項目を共有しふりかえる時間が締めくくりになかったことが残念だった。また、議論がその担当項目から外れると重要な視点であっても少し掘り下げにくかったりしたので、最初から担当項目を分ける必要はなかったように思う。
- もっと議論する時間がほしかったものの、時間的制約を考えると適切であったと思う。
- 適当。あまり長くやっても、現場で調査しているときに項目のまとめ方など結局変わってくるので、ブレーンストーミング的で丁度よかったと思う。
- 議論の段階でテーマが広がりすぎたことで研修全般に亘って影響を及ぼしたかもしれません。早い段階で細かい課題に絞り込んでいければ良かったと感じました。(NGO)

- (12) ご自身で、事前にもっと準備しておけばよかったと思うことがありますか?また、 それは現実にやれそうでしたか?
- 他の参加メンバーとのメールなどを通した自主勉強会。今回の参加者は東京を中心としており、時間を取って集まれば、事前に何度か勉強会を設けることもできた。(JICA)
- もっと、参考資料をきちんと読んでおくべきでした。(NGO)
- 事前準備には限界があるので、この程度が妥当。(NGO)
- 事前課題には目を通していたが、細部をきちんと理解するまでには熟読できなかった。 (JICA)
- (すみません、調査準備ではないですが)、歌、出し物!炭鉱節や○○音頭の CD を持っていたのに、すっかりそういうことには頭が回りませんでした(現地住民との交流の機会があったことから)。(NGO)
- フィリピンの歴史や文化、援助状況などを学習し、また、課題プロジェクトについて 自分なりにもっと情報収集しておけばよかったと思う。でも、現実には出発前の状況 を考えると難しかった。(JICA)

Ⅳ. 海外研修のプログラム内容について

(13) 現地でのスケジュール全体は、妥当でしたか?

ア. ほぼ妥当 (6名)

【コメント】

- 確かにきつかったことは否めないが、研修日程をこれ以上延長することは 難しい一方、これ以上視察やインタビュー時間を削ると研修目的の達成が 難しくなることを考えると、妥当であったと思う。(JICA)
- できればあと 1 日ほしかった。途中、午前半日×2 回分。午前半日をグループワーク、視察・インタビューは午後にすれば、前日夜は個人で振り返り考える、あるいはグループで自由にブレストできる。(JICA)

イ. きつかった (6名)

【コメント】

- スケジュールに関しては多くの改善が必要に思われる。事前にもらったスケジュールの中に夜のワークショップの時間が明記されていない。バランガイ・ホールは基本的に表敬訪問だけで、30分ぐらいで十分だった。また、事前に連絡しておけば村の人口、面積、主産業、その他諸々の基礎資料は紙もので用意してもらえたのでは? 各グループたった三、四軒の民家訪問インタビューで結論を導くには限界があるのではないか。事前に「ふりかえりシート」を配布しながら、それを確認することも、そもそも各自が入手した情報を整理したり、振り返る(自分のものとして消化する)時間がなかったように思う。(JICA)
- あと一日マニラ滞在を増やしてグループごとにディスカッションし、発表 の準備をしたほうが、より良いと思いました。(NGO)
- 自立発展性というと、どうしても個々の事象に拡散しがちなテーマである ので、しかも関心も個人によって違うため、あまり全員での事象情報に関 する詳細な共有に時間を費やすのはもったいないように思いました。プロ ジェクトの終了時期における自立発展性についての研修(あるいは検証)

ですから、全員が同じ情報を個々に共有する必要はないのではないでしょうか。概念の共有があれば十分ではないかと思います。また、もし個性的な分析を引き出すならば、小グループメンバーを何度も交代しない方がよかったかも。たとえば、いずれ報告会で JICA の事業とアジア学院の事業に比較して考察するのでしたら、ある時期に JICA グループと NGO グループに分け、違いは違いで鮮明にする、なども面白いかもしれないです。ただ、個人的には JICA、アジア学院の 2 つを分類するのではなく、共通する性質、違っている点などがどのようなポイントで形成されるのかが見てみたかったので、できれば両方を別に扱って検証する方略は避けたかったのですが。

● スケジュール中にグループワークの時間を予め入れてほしい。全体のスケジュール終了後にグループ内のまとめとなるので、作業が夜遅くまでとなり、体力的に厳しいものがあった。(NGO)

(14) もっと時間のほしかった訪問場所・プログラムがありましたか?

- 基本的には全ての訪問が適切だったと思う。MC-ARI のバゴ市でのお店(ハロハロなど 販売)の訪問は、自立に向けた活動の一端を視察できて良かった。失敗した NGO の農 場についても、短時間ながら視察できたことは良かった。サンタ・リタ周辺における オルタ・トレードの存在は大きいようだったので、時間が許せばオルタ・トレード関 係者にも活動の話を聞きたかった。(NGO)
- フィリピンでの報告会の準備時間がほしかった。(JICA)
- MC-ARI で過ごす時間。(NGO)
- SBTP のプロジェクトでは、モデル校的な学校だけではなく、平均的な学校の実情が見たかったが、アレンジをするフィリピン側の立場を考えると致し方なかったかも知れない。サンタリータ農場のスタッフへのインタビューにもっと時間をとりたかった。グループワークを中心とした研修にするのであれば、グループ内での情報共有や取りまとめの時間をもう少し確保しておいて欲しかった。なるべく夜中の作業は避けるべき。(IICA)
- アジア学院関係者に質問をする時間。日本で質問をするチャンスが多々ありましたが、 案件の概要をつかんだ上でアジア学院の方に再度質問するチャンスがあれば尚良かっ たように思います。(NGO)
- 殆どのプログラムが思考することだけだったので、サンタリータ研修センターで行った、体を動かすような体験が、もう少し時間があっても良かった。(NGO)

(15) もっと短時間、あるいは訪問しないでも良かったと思う箇所があったら教えてく ださい。

- つぶれた研修センターは訪問しなくても良かったかもしれません。訪問できたことは 貴重な体験でしたが、その時間を他の活動に当てたほうが良かったかもしれないとも 思うのです。(NGO)
- MC-ARI が多少交流をもっているという地方行政があると聞いたので、バランガイ訪問はそちらに行ければよかったです。(NGO)
- (主に休憩のため、予定外に立ち寄った)オイスカは大変興味深かったものの、研修 内容には関係はあまりなかった。(NGO、JICA)

(16) インタビューは十分出来たと感じていますか?何か改善点はありますか?

- グループなどで、前日にどのような箇所を重点的に聞きたいか話し合う時間が持てたことで、インタビューも充実したと思う。(NGO)
- 各訪問先での小グループに分かれてのインタビューについては、集合時間、集合場所を明確にして欲しかった。人数がそろうまでの時間が無駄になるケースが多かった。 英語で直接コミュニケーションが図れない部分については、多めに時間を確保しておく必要がある。特に農民や子供にインタビューする際には、インタビューされること自体に慣れておらず、想像以上に時間を要する点に留意する必要がある。(JICA)
- ある程度十分にできたと思います。あえて改善点をあげると、実際には英語を達者に はしゃべられない方もおられ、言葉の問題はあったので現地語を話せる伊藤さん、吉 田さんの役割は大きかったと思います。(NGO)
- 十分すぎるほどできました。(NGO)
- 一つはインフォーマル・インタビューの時間を設けること。その一方で、限られた時間の中でのグループ・インタビューでは、興味関心だけであまり意義のない質問を長時間にわたってしないように調査手法についての講義が必要だと感じた。(JICA)
- インタビューの時間は両プロジェクトあらゆる場所で十分に時間的な配慮がされていた。(NGO)
- JICA プロジェクトの方は十分にインタビューができたように感じているが、アジア学院の方はもう少しじっくりインタビューができればよかったと感じている。その原因は、プロジェクトそのものの特徴にもよるが、インタビュー対象が多岐に渡ってしまい、プロジェクトの重要なアクターに十分に話を聞けていない印象を持ったからではないか(例えば、女性グループに対するインタビューの際、女性グループの活動は、今回の対象と捉えていいのか悩み、それゆえ、インタビュー開始時にインタビューの必要性を疑問視してしまった)。(NGO)
- 調査の基本的な方法等なにも知識のないまま行ったので、事前になにかいいヒヤリングの仕方などの講義や説明を受けていたら(資料だけでもよいが)もっとよかったかも知れない。(JICA)
- (17) 帰国後の報告会についてのアドバイス、コメントがありますか? (改めて集まったり日数を掛けることに制約があるため、帰国直後に設定しています。時間・内容等改善点があれば挙げてください。)
- 帰国直後にやることで、それまでのインタビュー、分析内容をまとめることができよかった。時間帯として、もう少し JICA 関係者や NGO 関係者が来やすい時間に、とも思うが、参加者の体力上、今回の形が妥当だったかと思う。(NGO)
- 特にありません。(NGO)
- 今回のように報告会当日に、ワークショップから始めて、新しいグループ分けでまとめの作業を行うのは、報告会の「見栄え」の意味では良くなかったと思う。しかし、見栄えの良い報告会が目的ではなく、参加者個々人の中での気づきや整理であることを考えれば、あれでよかったと思う。前夜、準備のために徹夜することもなく、しっかり休むことができたのも良かった。ただし、報告会当日に一から作業を行うのであれば、せめてさらに 1~2 時間の時間が欲しかった。(JICA)
- 非常にあわただしかったことは否めないが、最後に皆でアイデアを整理し、グループを一新して報告を行ったことは、学んだことの再整理の機会となり良かった。(NGO)
- 発表前に、グループシャッフルしたのは、グループごとの視点が融合されてよかった

が、実際発表内容を聞く限りでは、グループ内でうまく意見が合意に達していなかったようである。もうすこし、最後のグループシャッフルを早めにしてもよかったかもしれない。(NGO、JICA)

V. 運営・実施方法について

- (18) 海外研修の実施時期は適当でしたか?
 - ア. 適当(11名)
 - イ. 他の時期がいい (1名)
- (19) 研修の期間(全体で9日間)はいかがでしたか?
 - ア. 適当(11名)
 - イ. あまり適当でない(1名)

【コメント】

- 10 日間がよい。
- (20) 研修生の人数はいかがでしたか?
 - ア. 適当(12名)
 - イ. 余り適当でない(0名)
- (21) 班分けはいかがでしたか?
 - ア. 適切 (9名)
 - イ. 余り適切でない (3名)

【コメント】

- 今回は、期間中、同じグループで議論を積み重ねた挙句に最後でグループ 再編を行ったので、議論を深めるまでに至らなかった。報告まで同じグル ープ編成で行うのでないのであれば、報告の直前に1回だけ組み替えるの ではなく、むしろ途中で何度か組み替えをしてみたほうが良いのではない か。そうすれば、より多様な考え方に触れられる上、こまめに参加者間の 意見の共有が図れたのではないか。(JICA)
- グループの人以外の意見交換が中々出来なかった。(NGO)
- (22) 日本からの同行者について、お気づきの点やアドバイスを率直に書いてください。
- 各自それぞれの役割があり、適切な助言やアドバイスをいただいたと思う。問題はスケジュール管理。(JICA)
- 同行者の方々には非常によくやっていただいた。特にコースリーダーの磯田先生には、 コース全体の運営から日常の生活、人間関係まで細やかに配慮していただいた。唯一、 訪問先での時間の管理については、同行者のどなたかに仕切っていただいたほうが良 かったのではないかと思う。(NGO)
- 的確なアドバイス、ファシリテートに加え、調達や準備などで細やかなお心遣いを頂きました (NGO、JICA)

- (23) 宿・食事・車・フライト等の全体的は満足度はいかがでしたか?
 - ア. 満足(11名) イ. 普通(1名) ウ. やや不満(0名) エ. 不満(0名)
- (24) 今回通訳を付けませんでしたがいかがでしたか?
- 英語圏で必要はなかった。今回も現地語、英語、日本語と場面によって通訳を必要としたが、適時必要性に応じて通訳の役割を担う人がいた。参加者の中で助け合いながら、聞き取れなかったところはお互いに確認して理解を深めることができた。(JICA)
- 多少聞き取れないときがあっても誰かが聞き取っているので十分。(NGO、JICA)
- (25) 参加者に担っていただいた係りはいかがでしたか?
 - ア. 特に問題ない(10名)
 - イ. 問題あり(0名)
 - ウ. 回答なし(2名)

V. 今後の取り組み

- (26) 来年、この「NGO-JICA 相互研修」で取り上げたら良いと思うテーマがありますか? 所属されている団体から参加させたいテーマはなんでしょうか?
- 今回のテーマと同様、現地の NGO や、CBO などとどのような関係を築くのが理想であるか、自立発展につながるのかといった点。また、自分の関係している部署として、難民支援や、緊急支援についても相互研修できる場があれば有難いです。(NGO)
- そのものズバリ「NGOの強み、JICAの強み」。一番ありがちなテーマではあるが、これだけの時間をかけてじっくり議論する機会はあまり無いのでは?(過去にすでに扱われたテーマかも知れませんが…)(JICA)
- プロジェクトの効果の測り方(ソフト型案件について)、効果的なプロジェクトの立案、 実施まで(ニーズの吸い上げから立案まで)(NGO)
- 自立発展性(NGO)
- 「開発」「交流」目指すものは、裨益者にどのように理解されているか。 事業実施段 階での日本人の存在とそのあり方について。(NGO)
- ①同じテーマでもう1年 ②中間評価と軌道修正 ③ニーズ発掘(よい形成のあり 方とは?) ④イスラム圏での事業形成・実施 ~宗教的配慮と共に~(NGO)
- NGO と JICA の連携をテーマとして取り上げてはどうか。例えば、NGO と JICA が連携するプロジェクトの実施は可能か?を副題とし、互いのプロジェクトの特徴、相違、これらを踏まえた、連携のメリット、連携をする際の留意点を探るのはどうか。(NGO)
- ジェンダーの視点をどのように取り入れれば効果的か。(JICA)
- 今回の「終了」からぐるっと返って、プロジェクトの「立案」。立案時に必要なポイン トなど ②評価指標の設定の具体例。農村開発、教育、保健医療等の分野で。(NGO)
- 「安全保障と復興支援」(JICA)
- 「プロジェクトを進める上での選択」というテーマで、プロジェクト形成の段階から、 ゴールビジョンまでを設定し、それぞれの立場でなぜその方向性を選択したか、そし

- ★ その他、事務局の手配・準備等についてお気づきの点、改善点など、率直にご記入く ださい。また、上記質問ではカバーされていなかった次回への提言などありましたら ご記入ください。
- 国内研修・海外研修共に、NGOの事例として、非常にユニークで JICA の事業とは対照的な(プロジェクトとしての形式・規模や計画性において)案件が選定されていて、大変興味深かった。しかしその反面、オーソドックスな開発プロジェクトを実施している中規模以上の NGO の活動を見る機会がほとんど無かったのが残念だった。 JICA の事業も幅は広いが、プロジェクト運営方法については一定の形が出来上がっている一方で、NGO の活動には、団体によって扱う内容も方法論も実に幅が広いと言える。したがって、国内研修と海外研修とで異なった NGO 案件を取り上げるのであれば、なるべくタイプの違うものを選定していただくのが良いのではないか。 NGO と JICA とを比較してみるにも、土俵が違いすぎると比較が難しい。あえて類似の案件をぶつけてみるのも面白いかもしれない。 (JICA)
- 毎日のインタビューの内容をシェア、整理する時間が多少短かったような気がしました。何かもう少し効率的な方法があるとよいと思うのですが、それが何かは現在思いつきません。ただ、事務所をあまり空けられない各人の事情から、研修日程をこれ以上延ばすのは得策ではないと思うので、結局はそれぞれの努力で夜なべ仕事をするのが妥当かと思料します。(NGO)
- 今回は現地から参加させていただきましたが、今後も是非現地参加を増やしていってください。現地で働いているものとしての意見をシェアできますし、言葉を話せるという利点があったと思います。(NGO)
- すべてを万全に準備していただくに越したことはありませんが、現場でみんなでできる限り力を合わせるような「仕掛け(ハプニング?)」があるのも、より研修をうまくいかせるコツかもしれません。(JICA)
- 今回、最初から JICA、NGO が混ざった形のグループ分けでしたが、JICA の立場から見た意見、NGO の立場から見た意見などを議論することが出来るグループ分けも、研修中のどこかであっても良かったかもしれません。(NGO)

付録

- 研修募集要項
- ・研修経費

テーマ:「プロジェクトに終わりはあるのか?~自立発展性を考える」

1. 研修の趣旨

国際協力機構(JICA)と(特活)国際協力NGOセンター(JANIC)は以下を目的として相互研修を開 催します。

- (1) 国際協力を実施する上でのパートナーとしてのNGOとJICA双方についての理解促進と、国際協力に関する認識を共有すること。
- (2) 将来の連携に向けた人的ネットワークの形成と情報交換の場を提供すること。
- (3) 上記(1)、(2) を通じ、NGO及びJICA双方の若手及び中堅職員の人材育成に寄与すること。

2. 今年度の研修の概要

昨年度参加者に非常に好評であったこと、また奥深い課題であり更なる学びが得られると主催者が判断したことから、今年もあえて昨年と同じ「プロジェクトに終わりはあるのか?~自立発展性を考える」をテーマに選びました。NGO、JICAそれぞれのプロジェクトを研修材料として取り上げ、プロジェクトの自立発展性や協力の終了の仕方を意識した協力活動計画策定やプロジェクト運営時点での基本的な考え方や留意点について、各参加者の経験とノウハウを持ち寄っての相互学習を行います。また、受講者の中から、希望者については、海外(バングラデシュまたはフィリピンを予定)のNGO及びJICAのプロジェクトを訪問し、国内研修の成果を更に深める機会を提供します。海外研修参加者は訪問先のプロジェクト関係者に対してヒアリング等の調査を行い、その結果を取りまとめて事後報告会の場で発表していただきます。

(但し、希望者が海外研修定員を上回る場合は、あらかじめ参加資格要件に基づき選考させていただきますので、ご了承願います。)

3. 参加者資格要件

- (1)原則として2-10年程度の開発援助分野での実務経験(国内外を問わず直接業務を行った経験)を有する者で、かつ今後も同分野での活動を継続する予定の者。
- (2) 直接的もしくは間接的に海外プロジェクトに携わった経験を有する者。
- (3) 研修の主要部分はワークショップ形式で実施されるため、その中で所属団体または参加者自身が携わったプロジェクトのケースを紹介するなどの貢献ができる者が望ましい。
- (4) 日本に事務局を置く開発援助に携わるNGOもしくは国際協力機構のスタッフで、所属団体の責任者からの推薦がある者。
- (5) 原則として国内研修の全日程への参加が可能な者。 海外研修参加希望者は事前研修、事後報告会を含む全日程への参加が可能な者。 なお、海外研修のみの参加はできません。
- (6) 参加者決定にあたってはJICA主催の研修に初めて参加する方を優先します。 また、海外研修については、英語によるコミュニケーションが可能で、研修の成果を所属団体の 活動に直接反映できる方を優先します。

4. 主催者

独立行政法人国際協力機構(JICA)、特定非営利活動法人国際協力NGOセンター(JANIC)

5. 研修期間

・国内研修:2004年9月16日 (木) から9月18日 (土) (2泊3日)

9月16日 (木) は10:30集合、9月18日 (土) は16:00頃終了予定です。

・海外研修:2004年11月18日(木)から11月26日(金)(8泊9日)

事前研修及び帰国報告会各1日を含みます。

6. 研修場所、宿泊場所

国際協力機構 東京国際センター(JICA東京)(所在地:東京都渋谷区西原2-49-5)

*原則として全員JICA東京に宿泊していただきます。

7. 募集定員

NGOスタッフ16名、JICAスタッフ16名 合計32名 なお、海外研修の定員はNGO、JICAスタッフ各7名、合計14名とします。

8. 研修経費

研修にかかる経費(教材費、JICA東京での宿泊費、海外研修の渡航費や現地経費など)は、すべてJICAが負担します。

研修参加に要する交通費は、東京近郊以外に居住する方についてのみ、JICAの規程により支給します。

なお、海外研修に参加を希望される方については、ご自身で一般旅券を取得願います。

9. 参加証明書

主催者より、国内研修、海外研修それぞれについて、全日程を修了された方に、参加証明書を交付します。

10. 申込方法及び選考方法

別添の受講申請書(様式1)に必要事項を記入の上、所属団体の責任者の推薦状(様式2)を添えて、2004年7月21日 (水)までに下記研修事務局まで郵送してください。締め切り日までに書類が揃わない場合は申込みを受け付けませんので、ご了解下さい。

受講者は主催者側で選考の上決定し、海外研修参加可否を含め、事務局より本人に通知します。

11、研修に関するお問い合わせ

受講申し込み等研修に関するお問い合わせは、下記までお願いします。

NGO-JICA相互研修事務局

独立行政法人国際協力機構 国際協力総合研修所 人材養成グループ NGO-JICA相互研修事務局 〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5

Tel: (03) 3269 - 3022 / Fax: (03) 3269 - 2054

2004 年度 NGO-JICA 相互研修 研修経費

(単位:千円)

項目	支出内容	経費
謝金	以下に係る謝金	11250
1000	検討委員会開催(7回)	
	• 国内研修講師	1,742
	・海外研修講師・同行者	,
	・コースリーダー	j
 教材費	参考資料購入	450
	報告書作成	450
国内研修旅費	国内研修参加者・関係者に係	260
Į	る交通費	363
設営費	検討委員会、国内研修、海外	
	研修事前研修の会場設営費	99
 海外研修	海外研修参加者・関係者に係	
<u> </u>	る国内交通費、航空賃、日当、	4,320
	宿泊費	
	現地業務費	328
 宿泊費	国内研修、海外研修事前研修	-
	に係る国内宿泊費	636
	合計	7,938